

I

問一 ウ

問二 水との差異を維持しつつ水と渾然一体化し浮遊するクラゲの生のありようによって、生命の根源に触れるような陶酔感にとらわれ、特定機能をもつ諸器官の総体からなる身体をもとに自他を区別しながら日常の生を営む人間のありようが自明ではなくなるといふ意味。

(一一〇字)

問三

クラゲをも補食する魚類の大量捕獲や大洋を渡る貨物船の運航、魚の養殖、海底への人工構築物の設置、プラスチックゴミの廃棄といった人間の活動がこのまま続くと、それが作り出す海洋環境がクラゲの増殖を促し、生物多様性を低下させかねないクラゲを頂点とする食物網が、これまでの大型魚を頂点とする食物網を凌駕するようになるという事。

(一五九字)

問四

(ア) 現実とは乖離した水槽という人工的環境下で観察されるクラゲは、人間の生の営みとは接点のない対象として美化されてしまっから。

(六〇字)

(イ) 人間の積極的な加担によって世界の海にクラゲだけが氾濫

し、人間との二者択一的な覇権が併存する未来が到来しかねないから。

(五八字)

II

問一

- (a) 困窮 (b) 操業 (c) 奴隷 (d) 執着

問二

前者は、資本主義経済が進展した社会において、情報通信技術等を利用して不用品を交換するといった限られた資源の有効活用と、失われた人の繋がりやコミュニティの再興を意図する暮らしたが、後者は、新品を購入する能力が不足した発展途上国の社会において、富の分配を是とする社会規範の下、モノがその寿命限界に至るまで贈与や転売を通じて社会の中を循環し続けるという暮らしである。

(一八〇字)

問三

個人が身体に基づく労働を介して得られたモノに対して、排他的な権利を有するという、私的所有論の考え方。

(五〇字)

問四

所有権が明確な場合でもモノを他者に譲渡し循環させるタンザニアの事態は、個人の私的所有の喪失を表すとしても、富者から貧者への分配を是とする社会規範を道徳的に遵守しつつ社会全体の経済実践を成り立たせ、魂が込められたモノの履歴を介して人や社会の紐帯を維持し、また他者とは区別された自己の確立をも促すという意義を持ち、それは他の社会の人々にも示唆に富むものである。

(一七八字)

問一

問一

(ア) 今の時代といっても、和歌を詠む程度の者などは、ほとんど誤ることがないのをさへ、このように誤っているのは。

(イ) 「をも」「をや」の「を」は助詞としてワ行の仮名であるべきところを、「面」「親」のように、ア行の「お」という万葉集の表記のように使っているのが誤りで、また、「忘」を「者摺」と表記すると「わ」と「は」の万葉集の表記をまねた仮名の書き分けが誤りである。

問二 それを思うと、これも昔の一つの本であったのを、後に漢字でわざわざ書いたのであるにちがいない。

問三 古い時代の仮名遣いを問題にしていたはずの賀茂真淵が、正しい仮名遣いである『伊勢物語』の仮名本をとっても悪いものだとし、仮名遣いの誤りが多く拙劣な真名本を、ものごとを論じるときに根拠にするほど高く評価していたこと。

問四 仮名の清音濁音を書き分けているのは最近国学という学問が始まってから後の人でなくては、そのようにはできないことである。

問五

「この本」の書き手には、時代による言葉遣いの変化を理解していない誤りが随所に見られ、その一つとして、誰々に「あふ」という場合、助詞の「に」を添えずに表現した平安時代の言葉遣いでなく、筆者の生きた江戸時代の言いかたである「くにあふ」という表現に従っているから。